

# オーラルヒストリー：太平洋戦争

## 祖父が経験した東京大空襲

自分：

まず、始まる前、昭和15年の時についてですが、

祖父：

昭和15年、もう、日中戦争が始まっていてその時、おじいちゃんちが小学校6年生くらいの時、出征兵士でみんなでるわけね、兵隊に行く人あるでしょ、それでそれを送るのがおじいちゃんち小学生が日の丸検事団というグループを作ってね、村で、街で、それでその人たちを出征兵士を送るんだよ。

それでその時にね、おじいちゃんは鼓笛をやっていた。太鼓をやって、他の人はラッパを吹いて、それでもって駅まで送っていくと。そのようなことをやっていた。毎日ではないけどね。日中戦争の時ね。それでおじいちゃんの兄さんというのは中央大学の学生だったんだけどね、その人も出征しちゃった。送って行ったよ。おじいちゃんと九つ年が違うからさ、もう中央大学の学生も動員されちゃった、大学の学生でも動員されていっただよ。

昭和15年の時は、その時は、まだ食糧事情はまだ良かった。まだそんな配給制度はなかったんだよ。それでまもなく配給になったけどね、食糧事情はある程度良かったんだよ。というのね、街で食堂もやっていたし、パン屋さんもあったし、それにちゃんと今と同じように。だからね、我々と同じように買おうと思えばパンも買えたし、お菓子も買えた。それで、うちはアパートやっていたでしょうね。

自分：

アパート、やっていましたね。どこでしたっけ。

祖父：

湯島のアパートやっていた。それでね、うちには学生さんが大勢いた。

自分：

何人くらいでしたか。

祖父：

うちはね、48部屋があったんだよ。5階建ての建物だった。

自分：

その時5階建というのは大きいですね。

祖父：

そう、大きかった。それで、1階は全部ガレージで、2階から5階までは各部屋があってね、48部屋があった。それで、学生、どういう学生がいたかということ、近所

で言えば、医科歯科の生徒、日大、明治、早稲田の生徒もいたかな。まあ、近所の学生が、御茶ノ水あたりに大学があって、日大の生徒も。

そういった学生が住んでいたね。そりゃね、食事なんか一切しないよ。住んでるだけ。外食してた。だけどね、うちの親戚がいたわけだ。うちの親戚はね、4人くらいいたんだよ。うちの親戚の学生。それはね、うちの学生で飯を食べていたんだよ。その時は賑やかだったんだよ。もう7~8人で食べるのは毎日だから。学生がいるわけだから。親戚が4人、うちの家族が4人、だから賑やかだったよ。

それで当時は、世の中は戦争というよりは、あまり切迫していなかったよ。だからタバコなんかはね、当時はね、光とか、鵬翼だとか、そういうタバコがあったよ。一般のところを出ていた。それで、戦争が始まる、大東亜戦争が始まる前になつたらね、みんな値上げしたよ。金糸上がって15銭、光上がって30銭、鵬翼上がって、そういう歌があって、急にパツと値段が上がった。それからまもなく配給制度が始まった。

自分：

自由におえなくなったということ。

祖父：

そう、自由におえなくなった。それでね、そのタバコもそうだけど、食糧、お米も配給制度になった。やたらおえなくなっちゃった。食券というもので、そういうもので、買いに行くわけ。それがないとおえないわけ。人数によっておえるわけ。ところが兵隊さんというのはね、1日3合食べる。1日3合ということはね、うちにも兵隊さんが部屋を借りていたわけ。そのアパートにいたわけだよ。その時は夫婦の兵隊さんもいたわけで、だいたい位の上の人は所帯持ちだったよ。そういう人たちはうちに何人かいた。サーベルを下げて、位でいうとね、少尉、中尉、大尉、こういう人、佐官級の人もおいたかな。そのくらいの人もうちに下宿、部屋を借りて住んでいたよ。そうすると、所帯持ちで、子供もいるわけだよ。兵隊もおいたから。家族みんなだ。そういう人たちは、お米はね、1日一人3合、というと、

自分：

3合というと、1食1カップで1日ですよ。

祖父：

1合で一カップ、だから一人一日3合くらい食べられたわけ。だから、軍隊ではそれだけ食べられた。それで、食券もあった。自分らが下宿しているからもらいたいんだよ。そうするとそれを全部うちにくれるわけだよ。すると自分ちが潤っちゃうんだよ。余分にもらうわけだから、そうすると、自分ちは、舞台上で持って食べるわけだから。うちでは米では不自由しなかったよ。兵隊さんがいるために。

あとはね、うちの兄貴は当時まだ中央大学卒業していなくて、兵隊に行って、静岡県の間は三島の連隊に入って、それから三重の航空隊へ行って。だけどね、法科の間は法科の間がね、飛行機の整備なんてできない。文系の間が理系のこと。飛行機の仕組みなんかわからないだよ。それでも三島の連隊に行った。行けば、階級が上がって、というのは試験があって、当時、軍隊でも。幹部候補生になるためには試験がある。するとね、もう三島に入った時に試験を受けてうちの兄貴がトップで受かったんだよ。それでね、三島の航空隊に飛ばされた。それでね、位が段々上がって。すると今度は剣も、日本刀も持てるようになる。すると当時の兵隊さんはね、うちの兄貴なんかは、昔はさ、鉄砲でもなんでも軍隊で調達するでしょ。ところがね、見習士官になった時にはね、軍刀は自分で買え、双眼鏡は自分で買えで。

自分：  
全部、支給されるわけではなかったんですか。

祖父：  
支給されないだよ。自分で買ったんだよ。

自分：  
けど、大変ですよ。

祖父：  
軍刀というのは、当時あちこちで売ってたわけさ、軍刀をぶら下げて、双眼鏡を持って、それで三重の航空隊へ行ったね。それで三重からね、サイパンへ行くってなって、もうおかしくなってきた時だから、戦況が不利になってきた時だからね、日本が。その時はね、長男は残れ、サイパンへ行かないで残れ。要するに長男まで死んだら家が絶えちゃうから。部隊長の命令だから、という命令で、ということで、長男は、うちの長男は残ったわけだよ。それで、今度はね、立川の航空隊へ行ったわけだよ。あそこの航空隊で。その時うちの家が戦災で焼けたわけだよ。その時、その時代ちょうどね。だから、昭和20年3月10日の時にうちが空襲で焼けちゃった。その時立川の航空隊にいたわけだよ。それだから、兵隊を連れて、缶詰なんかみんな持ってきてくれた。うちへと。立川から湯島の方まで。それで、うちは助かったわけだよ。何もなかったわけだから。何も焼けてしまって。それでずいぶん助かったわけだよ。その当時はね、昭和15年から16年だったよ。それで、その後はね、おじいちゃんちも、こっちに戻ってきたわけだったけど、その時、小学校の5年、6年という時に本当に平和だったよ。

自分：

何か大変だったこともなかった。

祖父：

紙芝居も表にくるし、縁日になればお宮さんで縁日やって、焼きそばもあったし、なんでもあったし、その時、昭和15年の頃はね、市電、今では都電になったけど、市電が縦横に走っていたわけだ。その時は医科歯科の前も走っていて、乗り換えがタダなんだよ。というのはね、いっぺん切符が7銭だった。大人7銭でね、自由に乗り換えができた。無料で。というわけで、浅草まで2回乗り換えをして、浅草へ行っちゃうだよ、遊びに。子供は半額だからね、大人は7銭、その半額だから子供は4銭くらいだったかな、よく覚えてないけどね。だから遊びに行く時はね、お金を10銭くらい持って行って、浅草まで一人に遊びに行って、それで帰りは無理して土産を買って、徒歩で帰らなければならなかった。歩いて行くこともあった。そうするとね、上野の松坂屋の屋上で遊んだこともある。

自分：

遊園地みたいになっていた。

祖父：

あったんだよ、だからね、当時。だからね、その当時の物価は、電車7銭、それで食堂の朝のランチは7銭だよ、やっぱり。今でどれくらいになるかわからないけど。それで、ライスカレーが15銭だった。で食べられた。そのライスカレーが食べたくてね、お袋に7銭じゃ。うち、忙しかったでしょ、大勢の人の食堂やったりさ、親戚の人も。だからお昼の時は、お金あげるから食べておいでと行って食べに行くわけだよ。その時のね、その時7銭、もうちょっともらいたかったわけだよ。そういう時代だったよ。7銭で食べられたかった。

自分：

その時カレーライスもまだあったんですか。

祖父：

あったよ。昭和15年。ライスカレーもどこでも、レストランもあった。それでね、うちの兄貴がさ、大学受験だから、うちには外国人もいたよ。うちのアパートに。

自分：

どんな人がいましたか。

祖父：

あの、宣教師でね、オーストラリアの人だったかな。それで、フランクというお父さん、ノラという奥さんがいて、宣教師だった。それで、大東亜戦争が始まるちょっと前にね、オーストラリアに帰ってしまった。要するに、戦況が、日本と戦争しそうだなど。そういう雰囲気があったわけだから。それでオーストラリアに帰ったんだけどね、その当時大学生は徴兵に引っ張られるという噂もあって、中には、うちの兄貴みたいに途中で召集伝書をもらって、国に帰ってしまう。徴兵検査もあって。だからね、うちにも段々歯が抜けたように学生がいなくなって、国に帰るから。学生は大体、うちにいる学生はほとんど男だから。御茶ノ水あたりは大学が多いでしょ。ああいう人達が住んでいたから。みんな男だったよ。あ、女性もいたんだよ。というのは、当時まだ日比谷公園でね、今でいう有名な人だけどね、ダンサーがいた。これはとても有名なダンサーでね、一人で住んでいた。この人は戦前だから、戦争が始まる前だから、ダンサーだってなんだってカフェだってあった。うちの近所にもあったよ。たくさんあって学生が入っていった。

ところがだんだん厳しくなるとね、その学生を取り締まる、今でいう特高というのがあってね、警察官が、私服の警察がいて捕まえるわけだ。酒飲んだりしていると、捕まえて連れて来ようとするわけだ。するとね、すぐうちの親父の名前が出ちゃうんだよ。保証人になっているから、うちの親父。そうするとね、親父が、今の地元の警察署にね、今の本郷警察署がね、呼ばれるわけだよ。お前のところにいる誰々がいると。こういうことをしたと。そうすると、うちの親父が謝りに来て連れて帰るわけだよ。要するに、身元引き受け人担っているわけだよ。うちに住んでいるから、うちの親父はね。だからね、そういうところに行かなければいいだよ。中にはね、二度も三度も捕まる学生もいるわけだよ。

自分：

厳しくなってくることで、捕まえる。

祖父：

段々段々厳しくなってくる、それで段々配給制度も打ち切られて、それで統制も厳しくなる。そこで食券も、札みたいなものも、それを持っていかないとお米に変えられない。そういう時代になっていった。段々戦色も苦しくなって。

それで昭和16年の12月8日に大東亜戦争が始まったでしょ。そうするとますます軍事色が強くなってきて、統制が厳しくなって、学生はそんなカフェでなんて遊んでられない。それでそういうところは全部閉鎖されちゃった。で、食堂もなくなってきた。食堂すらなくなった。そうすると食券を持って行けば食堂で食べられた。そういうところはあった。学生も食堂で食べなかったら干上がっちゃうもの。だから食券を持って食べに行く。そうするとご飯をくれるわけ。だから食券がなくなっちゃうと、二度も三度も食べちゃうとなくなっちゃう。そういう時は闇市で買うとか、そういうことになってしまう。だから闇屋も横行していたね。

自分：  
厳しくなっていくにつれて闇市も増えていった。

祖父：  
そう、だからそういう時代だったね。それが15、16年。昭和20年だから。それで3月10日の大空襲に、その時は屋上で、5階でおじいちゃんは見ただよ。それで、鉄筋だから焼けない、鉄筋コンクリートだから焼けないという気持ちはあった。焼けないと。みんな近所の人もそう思っていた。だからみんなうちへと避難してきちゃった。大勢。焼けないからいいだと。だから家へとみんな避難してきた。ところが、3階くらいから、火が吸い込んできちゃった。

自分：  
火がどんどん入ってくるんですか。

祖父：  
入ってくる。ガラスがぺろっと溶けてきちゃって。隣が木造でしょ。ここで焼ければガラスもぺろっと溶けちゃうわけだ。それで3階から火が入ってきた。3階、4階、5階と焼けてきた。

自分：  
下の階は、それほど焼けていなかったのですか。

祖父：  
段々今度は3階、4階、5階と焼けてきてそのあと2階が焼けた。1階はガレージだから焼けるものがないけど。ただ一室だけ、その部屋だけ事務所になっていた。そのところにはね、コンプレッサーや当時コンプレッサーやポンプだね。水を上に上げるポンプがね、下にあったよ。そのポンプ小屋があったり、そういう部屋が、コンクリートで囲まれているわけだ。木造でない、木を使っていない、そういう部屋が一つあった。そこに家の親父がいたよ。それで、これにある通り、俺は上にいて、遊んでいるわけじゃないけど、見てたでしょ、呼ばれてさ、早く降りて来いと、その途中に3階から火が入ってきて、あわてて降りてきた。それで逃げると言われて玄関からでて行った。だけど当時は周りは火の海だから、火に向かって逃げるようなものだった。

自分：  
もう、他に逃げる場所がなかった。

祖父：

逃げるところはない、逃げる場所は決まっていたんだけど、避難場所、医科歯科へ逃げろと。医科歯科へ行く坂道が、周りが焼けていて行けなかった。で、お袋と一緒に逃げて行ったんだけど、家の姉なんかは風邪で寝ていたんだけどね、布団を頭にかぶって、親父がその上から水をかけて、早く出るととドアを開けて逃がしたんだけど、おじいちゃんは鉄兜をかぶって、鉄兜は熱いから。わかんないだよ、家の中にいるときはどれくらい熱いのか、外に出ないと分からなかった。かなり熱かった。周りが焼けていて。向かえとこちらの家が両方焼けてみなさいよ。かなり熱いよ。

自分：

ただ、その、他に行くところがなかった。

祖父：

どこにもなかった。それで、あの、水筒を持っていたでしょ。水筒の中身が沸騰しちゃうんだよ。沸騰しちゃう、熱いから。だから水筒も捨てれば鉄兜も捨てて、で、背嚢を背負っていた。当時の学生は背嚢だったから。背中に背負って、ランドセルの大きいもの。昔の人は、そこに教科書などをいれて背負っていた。それも全部捨てちゃって、それを頭にかぶって、鉄兜を取ったら頭も焼けちゃうから。だけど、こういうところが、首の後ろも全部焼けちゃった。それで手で押さえているから、ここも全部焼けて、それで道路へ座っていたわけだよ。それが、戦争の焼け野原になるときにいたわけだよ。それで、向かえの親子がね、逃げ遅れてうちの家へ逃げてきた。うちの家族が外へ逃げて行った後だけどね。逃げてきて、でも親父が逃げて行って、でも逃げて来たもんだから、中へ入れてね、それでドアの隙間から空気が入ってくるように、呼吸ができるようにしてね、そのポンプ小屋だから、バルブがいっぱいあるから、バルブを全部開けて、水をジャージャー出して、それで上のタンクの水まで落ちちゃうだ、それを全部溢れさせて、水が溜まって、だから燃えなかったのかもしれないね。それで、最後までいたんだよ。でも、背中に背負っていた赤ちゃんは死んじゃったけど。窒息だろうね。熱風で。熱いし、家の中も煙が充満してくるから、こういう炭で、吸ってしまったんだろうね。ドアを開けちゃうと一気に火が入ってきちゃう。だけど、おじいちゃんはどこどうなったか意識が朦朧としていた。その、助け出されて、病院行ったときには、鼻の穴へと棒を挿したりしていたよ。鼻の穴が詰まっちゃっているから。それで目が覚めたよ。けど、もう顔もやけどで、手もやけどで、ものすごかったよ。それでもう、それでね、半年くらいは痛かったな。熱いし頭もガンガン痛いし、そういうあれだった。それが大体、順番揃っていなかったけど、そういう体験だった。

自分：



空襲があった後、どこに住んでいましたか。

祖父：

その後一時、阿佐ヶ谷というところに住んでいて、おじいちゃんだけ行った。で、後の人はね、分散して行って、うちの親父は、後始末があるもので、家の、このくらいの焼けない5階建てのアパートの焼けなかった一室があったので、そこにいらしたけど。それで、兄貴の方、立川の航空隊から兄貴が持ってきた食料で生活していたみたい。いく日もではないけど、その東京、地元がうちの親父の出身だから、地元の人が応援にきてくれて、俺たちはここに住むようになった。それで、その後、うちの親戚の子供がやっている社宅があって、そこに一族で住んだわけ。

自分：

その終戦、8月15日の時はどうでしたか。

祖父：

8月15日の時は、おじいちゃんは今の高校だね。今の高校へは2年から入った。転校してね。それで、ずっといたんだけど、それで、うちの兄貴は終戦になって、軍になって帰ってきた。でも、中央大学の途中だったから、あと行きたい、あと後続をやりたい、ということだったから、東京へいったわけ。それでね、東京へ行って、大学をなんとか卒業して、当時は、終戦直後だったからね、卒業はしたんだけど就職先がない。仕事もない。で、兄貴はいくら大学を出たからといって仕事なかった。だから職を転々としたね。転々としたけど、なんとか最後にはこの化学工場へいたけどね。おじいちゃんはね、その後、大学へちょうど入った頃、まあどこでもいいや、という感じもあったけどね、大学へ入って、間も無くうちの親父も、そういう環境で最後いたもんだから、これが元で亡くなった。呼吸困難だったんだね。そういうことで、そのあとは、おじいちゃんは苦学が始まったわけだよ。まあ、なかなか一口に言えないけどね。大学へ入っても、仕送りが無いわけだから、大学の授業料も。私学だったから、だから授業料をちゃんと払わないとそく出て行かなければ行けなかった。だから授業料から生活費まで全部自分で稼がなくてはならなかった。理系だからね、実験もあれば、それがあから、休めないじゃん。だからね、教養課程1年、教養課程なら良かったよ。3年、4年になったら実験ばかりだもん、やらなかったら到底卒業できない。それを休むわけには行かない。そうすると、やっぱり、夜、屋台を引いて、夜働いて。理想はそうだけど、体がなかなか続かないわけだよ。

自分：

その、ラーメンの屋台を引いて。

祖父：

そう、チャルメラを吹いて。毎日そのようなことをやっていたら、学校があるから。それでも行かなければいけない。そのようなことをやって、いろいろやってね、やっぱり、大変だった。苦しかったよ。食べるものを考えないといけなかった。時間を作ったって、お金を稼がないと。お金を稼いでも、今度はそれを持って。だから、今度は学校で食べる場合が多かったね。その当時は、実験をやっている時。学食だったね。で、うちがラーメン屋をやっていたから、学校の食堂なんかは馴染みになったよ。

自分：

結構、食べに来る学生も多かったんですね。

祖父：

そうだったね。多かった。当時は食生活は悪かったから。終戦直後の、大学の学食なんて今と全然違うからね。うどんだラーメンだ、そんなものばかりだったよ。そんなレストランで食べるようなものはなかった。だからね、最低の食生活だったね。ただね、そういう経験、そういう3月10日の大空襲のね、おじいちゃんの友達も体に火がくっついて火だるまになって、転がってきたのは今でも思い出すよ。助けてくれと、熱いよ熱いよと言われても、消すこともできなかった。そんな人がいてね、時々思い出すことがあるだよ。まったく悲劇というかね、だってね、数時間、3時間4時間の間に11万5千人の人間が焼け死んだんだから。もう死体が、道路へ、ごろごろだよ。防空壕の中でも焼け死んでいる人がいた。だってうちも4人死んでいたんだよ。家の中で。焼け死んでいた。あれは地獄だね。まあ、そういうのが本当にね、人に聞かしたくもないけど、言わなきゃ分からないもんね。あとでゆっくり資料を見さしてもらおうけど、ちょっと見ただけでは。

自分：

いろいろと戦時中の話を聞きますけど、このような空襲の話を聞くのははじめてでした。

祖父：

本当に、そうだと思うよ。実際に目で見ているから。おじいちゃんちは。あの言問橋、隅田川にかかっている橋があるだよ、両国に、そこにうちの学校が、日大一中だったからね、昔、日大一中の、今の日大一高だよ。そこへ入ったから。両国だったんですよ。御茶ノ水から電車で両国まで行って、学校がすぐなんで。学校があったんだよ。そこで当時、3月10日には電車が止まっちゃったから、次の日だったから、医科歯科で靴をなんとか借りて、学校へ行ってみようと思ったんだよ。あるいて両国まで行ったよ。言問橋という橋があって、そこにも死体がいっぱいあっ

た。その川の上で。なぜ上だったかという、川の上は焼けるものがないから、みんなそこへ逃げるわけだよ。だから周りがもう街が全体が火になってしまうと、今度はそれが竜巻になってしまうわけだよ。それで巻き込まれちゃって、橋の上の人が、みんな焼け死んだんだよ。炎がそこまで来て。それで一人体に火がつくとみんな焼けてしまう。そうするとこの欄干から落ちてしまったり、川の中にもいっぱい死体があった。そういう悲惨な、これは有名な話だから、言問橋の悲劇というんだけどね。これは実際におじいちゃんも見ただけど、こんなことは言葉では言い表せないよ。表現できない。もう、それでね、こう焼け死んだ人はね、女性や子どもだよ、ほとんどが。男はみんな兵隊へ行ってしまって。幼児か女性か子どもかお年寄りだったよ。そういう人らが焼け死んだ。まったくね、何て言うか、その、まあ、炎の中に焼けている人が、両側逃げるところがない。どこへ行っても逃げられない。みんな炎の中へと集まっちゃう。すると、人間が、山になって、熱いもんだから、すこしでも熱くないところへ入ろうとして、人間の山の中へ潜っていく。もう必死だった。おじいちゃんはそのような元気はなくて、見ていただけだけど、そこまできかなかった。それで、両脇が焼けたとき、どちらかが早く火がつく、そうすると早く焼け落ちる。すると、真ん中にいる人が焼け落ちた方へ寄って、だから、人間は熱くない方へ行くから、焼け落ちてしまうと、もう熱くないから、火がなくなるから、するとそっちへ行ってしまふ。歩道に降りたんでしょ。そうするとね、もう助けてくれと言われても誰も助けられない。結局神様仏様というしかない。その終いに意識がなくなってしまう。これはね、こういうのはね、実際に文に書き出すとなると難しいけどね。

自分：  
やっぱり、表現するのが難しいですね。

祖父：  
難しい。難しいよそりゃ。だけどね、いろいろなものを見てきたけど、母親がね、子どもをかばうというのは本当にあったね。もうね、自分のを取ってまで子どもにかぶせる。自分の髪の毛が焼けてしまうけど、ピリピリして。そういうのも見たよ。だってね、死んでいる親子を見ると、だいたい子どもを抱きしめていた。子どもをかばっている。あれはね、なんとも言えない。なんとも言えなかったね。まあ、そこへ行くと、男の意気地なしだな、と思ったね。まあね、そんなところです。まだまだ言い足りないことがあったけど、また、話をするよ。

自分：  
本当に悲劇ばかりで…嫌な思い出を思い出させてしまって、

祖父：

いや、そんなことはないけどね。これはね、人に伝えなければならないな。

自分：

その、こういう宿題ができるのもあと数年しかないと思いますし、

祖父：

そうだろうね。だけど、俺の年齢よりももっと若い人はわからないもの。それで、また俺の上の人は戦争に行っちゃっているから、わからない。そうだろうね。

## 感想

東京大空襲を経験した人は疎開していない子供や女性が多かったことを知って衝撃を受けた。実際に経験した祖父もなかなか言葉に表すことができないと話していたので、その悲惨さは私の想像をずっと超えるだろう。いつもは笑顔の祖父も、話し終えた時には涙を流していて、このようなインタビューをしてしまい申し訳ないと感じた。それでも自分の体験を残しておきたい、まだ話したいことはいろいろあると言っていたので、今後も何度か話を聞こうと思う。